

平成七年一月十八日、本学附属中・高等学校の情報教育棟の落成式が行われた。放送教育振興会からは、井内会長、加藤事務局長、本学からは原田学長をはじめ各学部長、各部課長、その他多数の来賓のご出席をいただいた。その落成式で、井内会長が生徒、教職員に対して行われたのが、ここに掲げる「ひとりの卒業生として」という講演である。

はじめに

本日、広島大学附属中・高等学校の情報教育棟の落成式が立派に行われ、まことにめでとございます。お招きをいただき出席をさせていただきましたが、せっかくだから何かみなさんにお話をしろということになりまして、慣れないのでお断りしたんですが、南村先生と小山先生とに押し切られました。壇の上にある羽目になりました。私はみなさんの先生ではありません。一人の、少し古くなりましたが上級生であり、本校の卒業生であり、アカシア会の会員の一人です。その意味で、みなさんの上級生として、先輩として、若干お話をさせていただきます。

先ほど小山先生からご紹介いただきましたように、昭和十一年の春、相生橋のたもとの本川小学校から附属中学校に入れていただきました。昭和十五年の春、当時は四年から高等学校に入る道がありまして、四年修了でこの皆実町の広島高等学校に入りました。それから、千田町の方に四年、この皆実町に二年半（戦争中で三年が二年半に短縮）、六年半学びました。みなさん、中・高ですから足らずと六年ですが、私は六年半みなさんと同じような学校で学んだということになるわけです。

夏目漱石はいろいろな作品を作りましたが、晩年「こころ」という作品を作ったあと、今から約八十年前、大正三年の十一月二十五日に学習院の子弟たちに講演をいたしました。その講演は、学術文庫の中で「私の個人主義」という題で出版されておりますが、この講演を読みまして、私自身も非常に感ずる所が多うございましたので、その一節をみなさんに紹介いたします。

「私は、今日はじめてこの学習院というものの中に入りました」というところから始まりまして、いろいろな人間の生き方について漱石らしい話をしたあと、結びとして、次のようなことを申しております。以下、朗読します。夏目漱石の文章です。

「いままでの論旨をいかつまんでみると、第一に自己の個性の発展を遂げようと思うならば、同時に他人の個性も尊重しなければならぬということ、第二に自己の所有している権力を使用しようと思えば、それに付随している義務というものを心得なければならぬということ、第三に自己の金力を示そうと願うなら、それに伴う責任を重んじなければならぬということ、つまりこの三か条に帰着するのであります。これを外のことばで言い直すと、いやしくも倫理的にある程度の修養をつんだ人でなければ個性を発展する価値もなし、権力を使う価値もなし、また金力を使う価値もない、ということになるのです。

それをもういっぺん言いかえると、この三者を自由に受け、楽しむためには、その三つのものの背後にあるべき人格の支配を受ける必要が起こってくるというのです。もし人格のない者がむやみに個性を発展しようとする、他を妨害する、権力を用いようとする

ひとりの卒業生として

放送教育振興会会長 ◆ 井内 慶次郎
元文部事務次官

恩師の思い出

文部省に入ったおかげで、母校が国立ですから、いつも母校を身近に感じながら仕事ができまわることが、非常にうれしいことでありました。

私の同級生には、戦死、戦災死、戦病死等もありました。海軍兵学校出身の潜水艦乗りで、先の大戦で亡くなったものもありました。非常に激しい時代をくぐってまいりました。

文部省で公務員としての三十数年の仕事が終わりまして、次官を退任するとき、附属中学校のクラス主任の尾野作次郎先生から、岡山におられました。電話がありました。

「長い間、文部省で苦学であつた。慰労したいので、文部省の近くの適当な場所をとっておけ」ということで、文部省の近くの料理屋さんに一部屋とりまして、先生をお待ちいたしました。お支払いは先生がされるわけですから、あまり高いところでもいかにし、あまり安いところでもいかにし、適当な所を選んで席を設けました。恩師がお見えになられて、「長い間文部省で苦学であつた。いままで文部省で、児童を育てることや児童・生徒・学生の教育などの仕事をやってきた。教育の『育』と児童の『児』、『育児』であつたが、これからは、教育の『育』に、なんじ自らの『自』で『育自』。これからは自分を育てることを考えなさい」という訓辞をいただきました。

濫用される、金力を使おうとすれば社会の腐敗をもたらす、ずいぶん危険な現象を呈するに至るのです。そしてこの三つのは、あなた方が将来において最も接近しやすいものであるから、あなた方はどうしても人格のある立派な人間になつておこなうてはいけません。要点を申しますと、もしも人格のないものがむやみに個性を発展しようとする、他人を妨害する、権力を用いようとする、他人を濫用される、金力を使おうとすれば社会の腐敗をもたらす、ずいぶん危険な現象を呈するに至るのです。そしてこの三つは、あなた方が将来において最も接近しやすい三つのこととがらであるから特に注意してください、ということをお夏目漱石が申しました。

インテリという言葉があります。インテリゲンチヤといいますが、インテリの陥りやすいまいところは、自分の教養を深め、自分の個性を豊かにするというところに熱心なのはいいんだけど、他人に対して非常に冷たくなる、冷酷なところがある。インテリの陥りやすいあの冷たさをわれわれは注意をして、他人の個性を尊重し、他人に対する温かさというものがなければ、個性の発展をすることには害を伴います。勢いをもって交わるものは、勢いが傾けば必ず離れていきます。利をもつて交わっているものは、利が窮すれば必ずばらばらに散っていきます。権力、利害によって結ぶのではなくて、もう少し深い、人間の心で結ぶ人間の交わりだけがいつまでたっても絶えないで、逆に月日がたつにしたがつて人の交わりが深くなつていくものだと思います。

この夏目漱石の学習院における講演は、私にとりましてもいろいろ考えさせられる言葉

皆さん、恩師というのは一生涯恩師であります。尾野先生は上京されると、よく私のところに荷物置いて、今日はこういう予定であるからここに電話をしておいてくれ、と言われて、荷物をお預かりして、尾野先生の言われるところに今日何時頃尾野先生が行かれるよ、という連絡をしておりましたが、それは教え子として非常にうれしいことでありました。



阿川弘之という名前を憶えていてください。いま、日本芸術院の第二部長です。一昨年、文化功勞者になられた方で、この方は志賀直哉の高弟で、「年々歳々」「春の城」「雲の墓標」「志賀直哉」等の作品のある方ですが、阿川先輩が昭和五十四年に日本芸術院賞、恩賜賞をお受けになりました。

皆さん方も附属を卒業されて、実社会に出られて、いろんなことをなさると思いが、恩師はいつまでも恩師です。尾野先生は先般お亡くなりになりましたけれども、私は文部省にいたおかげで、恩師といふ人な形でつながりが非常に深かつたことを、感謝しております。

附属の二人の先輩

阿川弘之と今堀誠二

それから、非常に愉快だったのは、次官をやっている時に、昭和五十四年六月、相当前ですが、昭和五十四年の六月に、芸術院賞、恩賜賞を第二十九回卒業の阿川弘之先輩が受けになりました。阿川弘之という作家の名前を高等学校の諸君か中学校の上級生はご存知かと思いますが、阿川弘之という人の名前をご存知の人はちよつと手をあげてみてください。

でありまして、みなさんにもこの言葉を今日ここで贈ります。個性の発展、権力の使用、金力の使用というのは、よほど注意しなければいけない。特にその三つにはみなさん方が一番これから近づきやすいものである。今日、夏目漱石がみなさんに注意するとすれば、おそらく同じ注意をするであろうと私は思います。その意味で、今、申し上げた三つのこと、今晚寝て、明日の朝起きて、三つのうち一つでも憶えておればなによりです。それから、そのことに関連いたしまして、ここにこういうものがあります。これは昭和六十年の五月二十日に、ちょうど十年前ですね、アカシア会母校創立八十周年記念事業運営委員会が作り出した「栄光よ永遠に」という小冊子であります。で、今日、みなさんにお会いするので、読み直してみました。附属の校長をおやりになつた方々が、それぞれ文章を書いておられます。このなかで、二人の先生の書いておられることに非常に私、心を打たれました。一つは「わが附属の特色は、教官の威信ある寛容さと生徒の主体性にある」と。広島附属中・高の特色の一つは、九十年の長い伝統に培われたものだと思いますけれども、先生方の、教官の威信とその寛容さ、これはほんとうに立派な伝統であります。それとも一つは、生徒の主体性を重んずるということです。これは、私たちの頃は男の子だけでしたから、ゼントルマンシップを養うということを目指しました。今はレディス・アンド・ゼントルマンになりますから、よきレディとなり、よきゼントルマンになるという、生徒一人一人を大事に育ててきた伝統を持つております。

それからもう一人の先生が、「真のエリート校」というのは、すべての生徒を精神的な貴

翌、昭和五十五年六月に、今度は第二十三回卒業の今堀先輩が、日本学士院賞をお受けになりました。これは「中国封建社会の構造」という研究であります。私はその年に文部次官をやめまして、国立教育会館の館長をやつておりましたが、国立教育会館で今堀先輩の中国社について講演会を開催いたしました。アカシア会の方が、第二十三回の同期を中心にして二十名講演を聞きにこられまして、なかには仙台から聞きにこられた方もありましたが、終わって夕食会を催されました。私もその席に招待を受けました。アカシア会というのは、年齢が高くなればなるほど正比例の原則で結びつきが強くなる、ということをお頭に置いておかれるとよいと思います。

夏目漱石の言葉から

今日、何かお話をということで、どうもお話をすればいいかと少し考えてみました。お二人の方のお話をいたします。お一人は夏目漱石です。お一人はヨゼフ・ピタウさんです。

族にするような人間教育を行う学校である」と。真のエリート校とはすべての生徒を精神的な貴族にするような人間教育を行う学校なり、とこの中に書いておられます。われわれが誇りとする伝統は、別に他校の生徒に対して、あるいは他人に対して、妙にすまして威張るということではない。わが附属の伝統は、精神的貴族をつくる学校である、ということをお校長先生が言っておられますが、徒に口外することではないが、私もさように思います。

夏目漱石の個人主義は、道義上の個人主義、人格主義ともいわれるものです。漱石が学習院の生徒諸君に訴えたものは、この「栄光よ永遠に」という冊子と基本的に通ずることではないでしょうか。漱石の講演に關係して以上のことをまず申し上げます。

ヨゼフ・ピタウ上智大学元学長の助言から

第二にヨゼフ・ピタウ。ピタウという人の名前を知っている人はありますか。これはなにか。上智大学の学長をおやりになつた方です。

東京に上智大学という大学がありますね、ピタウさんは上智大学の学長をやりました。その後、ローマ法王パウロ二世に招かれてローマ法王庁にお帰りになつて、法王の特別補佐官をおやりになつた方ですが、昭和三年、イタリアのサルジニア島に生まれました。イタリア人です。で、キリスト教カトリックのイエズス会の神父で、日本に來られたのが二十四歳の時です。私より少し若い人です。来日が二十四歳で、日本からアメリカのハーバード大学に留学をして、その後、上智大学の教授、理事長、学長をおやりになつて、五十六年にロー

マの方にお願いになりました。私が大学局長や、学術国際局長、次官をやっております時に、ちょうど上智大学の学長さんでいらるると私も親しくしていただきました。ピタウさんが五十六年にローマにお帰りになったんですが、五十五年の暮れ、クリスマス・メッセージを送ってくださいました。そのメッセージに次のようなことが書いてありました。「大学を去るにあたり、ある一つの話が胸に浮かんで来ます。オックスフォード大学に植えられた芝の美しさに感銘を受けたある訪問者が、庭師にその手入れについて尋ねたところ、庭師は、簡単なことですよ、種を蒔き、水をやり、ローラーをかけること、これを百年も続ければこのようになります」と答えたそうです。「教育は、人を育てるということ、これにもまして忍耐と献身と絶えぬ努力に支えられることを必要とします。私が学長として任期が来た時、だれかが、学生が教職員かだれかが、上智の芝生を少しでもよりよくしようと私が努力したことを知っていたら、出会うたすべの方々に深い感謝と祈りを捧げ、これからの皆様とともに歩み続けたいと思います」というクリスマス・メッセージを送ってくださいまして、ローマにお帰りになりました。

オックスフォード大学の立派な芝生を手入れしている庭師の人が、簡単なことなんだ、種を蒔いて、水をやって、ローラーをかける、これを黙々と百年続ければ、このような美しい芝生になります、と言ったそうであります。わが附属は、今年九十年を迎えます。千田町から皆実町に、学制改革もあり、また、原爆の悲劇にも会いましてけれども、九十年間、多くの優れた先生方によって、また多くの優

れた生徒によって培われてきた伝統、このわれわれの附属には、オックスフォードの芝生のように美しい芝生はない。昔の広島高等学校の運動場は美しいクローバーで覆われておりました。アカシアの庭と申しますけれども、この九十年間、黙々として水をやり、ローラーをかけてくださった先生方がある。また、そこで学んだ生徒がいる、それが美しい本校の伝統を作り上げておるんだということをしみじみ思うのであります。

ピタウ学長がいよいよローマにお帰りになると、「福田屋」で送別会をやつてあげました。その時に、ピタウ学長に、私は文部省に入つて三十年以上も教育の仕事をやってきましたが、どうも日本の教育はこのままでいいの、どつか大きなところで間違っていないのか、ボタンをかけたところはいいのか、日本の教育の前途が心配なだけども、何か助言、忠告をしていただけませんか、と言つて、ピタウ学長にお願いをいたしました。ピタウさんがにこっとして、「それは」と次のようなことを話してくれました。当時、おそらくジャイアンツが連勝しつた時なんだろうね。「ジャイアンツはほんとに強いチームです。だけど、ジャイアンツがセ・パ両リーグの選抜軍と一年中試合したら、くたくたになつて負けるにきまつてます。日本民族は一億ながして、非常に優れた民族だと思つて。しかし、その一億ながしての日本民族が四十億の人類を相手にして戦つたら、くたくたになつて負けて滅びるに決まつておるのではありませんか。」

日本人は、どうも私が見ると、外国人に対して緊張し過ぎておる。外国人に対していつも日本人と外国人というので対しすぎておるんじゃないやしませんか。緊張しすぎると

マニラの日本人学校を訪ねました。生徒たちが校歌を歌つて、私を迎えてくれました。この校歌の作詞は母親です。作曲は中学校二年の生徒二人の合作でした。マニラ日本人学校の校歌の中に次のような一節があります。「燃える未来かけて、われら果立つところ、常夏の並木染めて、マニラベイに日は沈む、希望の明日を信じ、広がれ世界に、君も僕も」。ことを少し変えます。「燃える未来かけて、われら果立つところ、アカシアの並木染めて、瀬戸の海に日は沈む、希望の明日を信じ、広がれ世界に、君も僕も」。

日本人学校の子どもたちの歌声を聞きながら、日本の将来は世界に広がっていくんだな、としみじみ思いました。「燃える未来かけて、われら果立つところ、アカシアの並木染めて、瀬戸の海に日は沈む、希望の明日を信じ、広がれ世界に、君も僕も」。

附属中学校の第一回の入学式は二十世紀の初頭でありました。諸君は二十一世紀のアカシア会の中心として、日本を支え、世界に広がつていってほしいと思つています。

こういう高い所から、わかつたような、わからないようなことをいろいろ喋りまして、ほんとうに失礼いたしました。一人の、あんまりでよくない上級生が、先輩として何かを皆さんに訴えて見たかったものですから、このようなお話をいたしました。これはみんな強引に私をこの壇上に引き上げた、南村先生と小山先生のせいですから、うらむことがあれば南村先生と小山先生をうらんでください。みなさんの人生航路がつつがなく多幸でありますよう心からお祈りをいたしました。お話を終わります。ありがとうございました。(拍手)

マニラの日本人学校を訪ねました。生徒たちが校歌を歌つて、私を迎えてくれました。この校歌の作詞は母親です。作曲は中学校二年の生徒二人の合作でした。マニラ日本人学校の校歌の中に次のような一節があります。「燃える未来かけて、われら果立つところ、常夏の並木染めて、マニラベイに日は沈む、希望の明日を信じ、広がれ世界に、君も僕も」。

先輩としてお話をしますので、アカシア会への私の思いを少し申します。少年少女時代、青春時代、附属に学ぶことになった連中が、卒業して年がたてばつほど、自らの少年少女時代、青春時代を懐かしみ、(間)ここから先が、ちよつときになるかもわからんが、少年少女時代、青春時代にみな母校が好きになるんです。みんなも、いやしくも附属の門をくぐり、附属で学び、附属で暮らす以上は、附属を好きになつてほしい。俗な言葉でいえば、附属に惚れ抜いてほしい。初恋というのは、他人に話すべきことではない。初恋というのは、内輪で話だけの話であつて、初恋の甘さと酸っぱさというのは、第三者に話すべきことではない。同じ母校に初恋のような想いを寄せたものの集いが、アカシア会だと私は思います。アカシアの庭での出会い、ふれ合い、巡り会いを大事にしなが、私、今七十一歳になりました。振り返つてみまして、多くの人に出会い、ふれ合い、巡り会つてまいりましたけれども、アカシアの庭での出会い、ふれ合い、巡り会いというのはほんとうに大事な出会い、ふれ合い、巡り会いであつたと思つています。これからの日本の状況、世界の状況がどうなるかを考えますと、非常に難しいことが多いし、視界も非常に悪く感じますけれども、しかし、附属でみんなが求め、培つてきた、曇のない知性と豊かな感性と確固たる徳性をもち、この索莫たる人生を生き抜いていくというのがアカシア会ではないか、と私はさように思つております。

学術国際局長の時にマニラに参りました。

ういうことになるかご存知ですか。肩に力が入ります。肩に力が入りすぎるとどうなりませうか。「肩に力が入りすぎると、人間というのは必ず卑屈または傲慢になる。日本人が外国人に対してのを見てると、外国人に対して卑屈になつておるのか、傲慢になつておるのかのどちらの人がほとんどです。同じ人間として、同じ人類として、ワンノブゼム(One is One)として、心を許し、同じ人間として生きていこうという生き方を日本人が身につけなければ、日本人は緊張しすぎて、卑屈または傲慢になつてだめになるんじゃないやしませんか」。

こう、ピタウさんが私に言つてくれました。なるほど、自分自身を振り返つてみても、なんとなく外国の人たちに対して卑屈になるか、あるいは傲慢になるか、どちらかに自分自身もなつておつたのではないかな、同じ人間同士として生きていくという、そういう生き方を身につけないと、ほんとうに日本人はこれから大変じゃないかなと。それがピタウさんの私に対する忠告だつたわけですね。

漱石に続いて、ヨゼフ・ピタウさんのお話をいたしました。ピタウさんがオックスフォードの芝生は百年かかつて非常に美しくなつた、それを庭師が淡々と話したと言いますが、われわれ九十年にして、われわれが九十年で種を蒔き、水をやり、ローラーをかけて芝生がどれだけ美しくなつておるか、目には見えなくても、われわれは九十年の間に培われてきたわが附属の芝生の美しさを確信しております。

東京アカシア会の話は少しします。アカシア会の中に東京アカシア会が作られてお

ります。今、東京のアカシア会の世話を私、させられております。東京アカシア会に所属の先輩方にはほんとに立派な方がたくさんおられるんですが、永野重雄、永野重雄という方のお名前を聞いたことのある人いますか。永野重雄、ないか。桜田武、これもないか。伍堂輝雄、これもないか。三人とも全部先輩です。皆さん戦後五十年の日本の経済の偉大なりーダーでした。

伍堂輝雄さんが東京アカシア会の会長をやつて、八十になつたからやめるぞとおっしゃる、会長は当然七十代の人がなると思つたら、七十代の先輩が全部遠慮されて、当時私は六十代でしたが、私が会長を仰せつかりまして、今、東京アカシア会の会長をやつております。おまえは学校のことでめしを食つたんだから、アカシア会に奉仕するのは当然であるといつて、先輩に脅されまして、アカシア会の会長を引き受けております。

みなさんもこれから、附属を卒業して、それぞれ進学をしたり、社会人になつていかれるわけですが、東京に長くおられて、アカシア会の人、いろんなことで遊びにきてくれたり、相談に来てくれたりします。アカシア会の方が訪ねてくださいますと、秘書とかそういう人たちが、アカシア会というのはみんなご親戚ですか、と言います。いや、親戚じゃないよと言つてますが、なんとなくアカシア会の人、みんな親戚、親類のような顔をして、親類のような調子で話したら、ま、と言います。まあ、親戚みたいなものだ、と言つてもあります。

いったい、アカシア会というのは何だろう。これは、人によってみな違うと思うんですけども、アカシア会というのは何だろう。特に今日みなさんにお会いするんで、一人の

アカシア会

阪神・淡路大震災に伴う義援金について

皆様からの善意のお陰をもちまして多額の義援金が寄せられました。心からお礼申し上げます。つきましては、募金の趣旨に添つて、左記のとおり学内関係者及び被災地の皆様方にお渡ししましたので、ご報告申し上げます。平成七年三月

広島大学阪神・淡路大震災義援金募金発起人一同 記

Table with 5 columns: 区分, 家族死亡, 家族負傷, 家屋全壊, 家屋半壊・損傷, 合計. Rows include 職員関係, 学生関係, 合計.

- 一. 本学関係者の被災状況
二. 学内募金
目的 広島大学教職員・学生の被災者及び被災地に対する義援金
対象 広島大学教職員中心
募金総額 六九一万四六七二円
四. 義援金の使途
(1) 本学関係被災者への義援金(四三六万円)
・ 家族死亡者に対する災害弔慰金「最高十万円」
・ 家族負傷、家屋全壊・半壊・損傷者への災害見舞金「最高五万円」
(2) 阪神地区被災者への義援金(二五五万四六七二円)
五. 義援金の支給
(1) 本学関係被災者への義援金支給(一部被災者)
日時 平成七年三月七日(火)十四時
場所 学長室
(2) 阪神地区被災者への義援金寄附
日時 平成七年三月七日(火)十五時
場所 日本赤十字社広島県支部

最後に
学術国際局長の時にマニラに参りました。